

全体に装身具を身につけるヒンバ。鉄製ビーズからなるものが多く、総重量は5キログラムをこえる



小学校で授業をうけるヒンバの女の子



館内での新着展示の準備



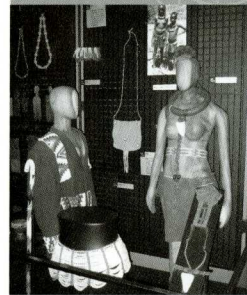
南アフリカのダーバンでのズールーによるビーズ細工の販売

アフリカン・ビーズの展示に込められたもの

地球を集める

池谷 和信
(いげや かずのぶ)

本館民族社会研究部



アフリカ展示場の一角



ナミビア

南アフリカ

みんぱくのアフリカ展示場の一角にビーズのコーナーがある。縦三メートル、横二メートルたらずの空間ではあるけれども、さまざまな素材からなるビーズが飾られている。ダチヨウの卵殻片からなる首飾りや腰飾り、ガラスビーズでおおわれた肩掛けや男性用背広、マネキン人形につけられた鉄ビーズ製の首飾りや足飾りのかずかず。これらは、二〇〇〇年にあらたに加えられた部分であり、わたしが現地で収集してきたものでもある。

五〇日間の収集のはじまり

みんぱくに赴任してわずか半年後のある日、アフリカ展示担当の和田正平部長に呼ばれて、「みんぱくには、南部アフリカの物がほとんどないので収集の希望をしてみる」といわれた。当時のわたしは、資料収集とはどういうものか、何を集めたらよいか皆目、検討もつかなかった。

それまでわたしは、南部アフリカの先住民サン(ブッシュマン)の研究を中心にすすめていたので、長期間の調査を経験していたサン、現地を訪問して関心のあったヒンバ、そしてズールーやコーサの人びとの文化にかかわる物を対象に収集しようという案はできた。しかし、テーマが定まらないので、何を中心に集めたらよいかわからなかった。

結局、一九九六年一〇月、南アフリカ共和国のケープタウンに着いたわたしは、いる子供もいるが、まわりの人のように洋服を着ることはない。わたしは、ヒンバの土地に行き、現地の事情に詳しく英語のできる通訳兼助手を捜した。ヒンバの土地と隣接して住むオバンボの農民の男性が見つかり、彼に事情を説明して、ヒンバの暮らす村や彼らの集まる場所をまわって、身につけているものを購入できないかと尋ねた。

ヒンバは、相手を見て値段を決めてくる。彼らに予想外に高い価格をふきかけられたり、断られたりすることも多かった。しかし馴れない駆け引きを続けたかいもあり、ある場所にやって来たヒンバから、幸運にもヒンバの女性の装身具を購入できた。首飾りは、長距離取引によって入手した白い巻き貝がついているので、既婚を示すものだ。足首の飾りは、民族のアイデンティティを示すものだ。足首の装身具を売ってくれた女性がその場所に布をまいていたのを見て痛々しく感じたことを、わたしは今でも覚えている。

結局、現地では都市の土産物屋にはない逸品も入手できたが、土産物屋の方が安いということもあつたし、現地ではどうしても売ってもらえなかったのに、土産物屋には並んでいたということもあつた。

初めての展示で民族文化を表現

当時、みんぱくではあらたに収集した物をいちはやく公開するために、「新着資料

ずは博物館や美術館を一〇カ所以上まわってどんな物があるのかを確かめ、三〇冊ほどの図録を集めた。次に、コレクター(収集家)が出入りする土産物屋に通い、どこで何が入手できるのか、いくらぐらいするかなど聞いてまわることで、物の情報や入手方法を把握できた。

その結果、当初予定していた地域の文化を紹介するうえで、ビーズが格好のテーマになると考えた。ケープタウンの店ではコーサのコレクシオン、ダーバンの店ではズールーの肩掛けや結婚式の衣装となるビーズなどを入手した。しかし、それらの多くは店の人が直接集めているとは限らないので、物にかかわる正確な情報を聞くことはできない。情報を収集するためには、現地をまわるしかなかった。

通訳を介しての駆け引き

わたしは、最寄りの空港までは飛行機、そこから現地にはレンタカーというかたちで、南アフリカやナミビアなどの五カ国を広くまわった。しかし、期待したとおり現地でビーズ細工を収集できたのは、ナミビア北部に暮らすヒンバの人びとの物以外にはあまりなかった。とくに南アフリカ国内では、当時すでに使われなくなっていたのである。

さて、ヒンバの人びとは、男女とも現在でも上半身は裸でいることが多く、「裸族」としてよく知られていた。小学校に通って展示のコーナーがあつた。当然、わたしは、翌年の一九九七年にアフリカ南部の多様なビーズの世界をテーマにした小さな展示を企画した。しかし、限られた展示の空間で何点くらい物を選んだらいいのか、検討がつかない。物みずからの主張に耳を傾け、きらりと光る一品、ビーズの多様性を表現してくれる物を選択しなくてはならない。幸い、館内にはビーズづくりを紹介する映像があつたので、展示場でその様子も同時に見せることができた。

その後のわたしは、各地の博物館や美術館を訪れる際に、ビーズが使われた展示品が気になってしょうがなかった。ニューヨークのメトロポリタン美術館では、ヨーロッパ産のガラスビーズの最大の消費地がアフリカの南部地域であるということを知り、感激したものである。二〇〇一年には、館内の企画の一環として『世界のビーズ』と題する小冊子を刊行させていた。この本は、アフリカ南部のビーズ細工を見るまなざしを世界各地のビーズに展開したものである。

わたしは、みんぱくに赴任するまではビーズとはまったく縁がなかった。それが最近ではビーズばかりに目がいきすぎて、それ以外に収集した物も数点あるのに、それらを収蔵庫のなかで眠らせてしまったまま。近い将来、それらを公開できないかとひそかに考えている。